342
1378

始

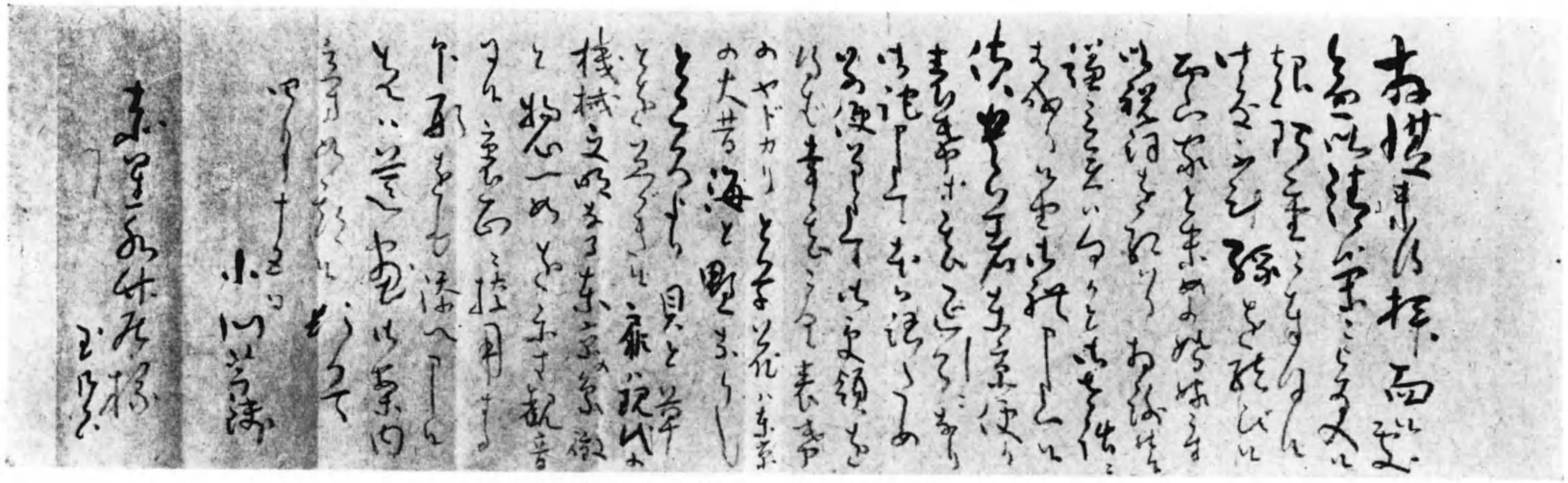
特234
6

東京便り

赤星水竹居著

昭和十二年六月

虚子先生が
洋行に際し
私達に残さ
れた寫眞



小川芋銭畫伯の裝幀に就てのお手紙

（虚子先生洋行決定のお手紙）

序

これはさきに郷里の俳誌「阿蘇」に連載して來たものを更に多少の修正を加へ小冊子として出したものです。

本來虚子先生から、「あなたは、よく物を咀嚼せずに鵜呑みにするからいけません」と叱られた私が、口に物を含んでゐるのか嚼んでゐるかも分らぬ様な物靜かな先生をスケッチしたのですから、到底其片鱗だにも寫し得てゐないことゝ信じますが、折角「阿蘇」の讀者諸君や友人先輩から「あれは面白いから本にして出せ」と勸めらるゝまゝに、早速それを鵜呑みにしてこんな本にして出した次第です。

幸にこの本が日頃虚子先生を慕ひ虚子先生の門下に學ぶ人達の爲に多少の參考ともなれば、望外の仕合はせです。

昭和十一年三月

水竹居

（一）

赤星水竹居

「阿蘇」のどこかに、「東京便り」と云ふ埋め草の欄を設けて頂きたいと思ふのです。

それは、私が發行所や句會などで、虚子先生の側にゐて、見たり聞いたりしたことを其儘手帖に書き止めて、東京便りとして送るのですが、勿論先生の御目を通したり、先輩諸兄の了解を得て送るのでなく、ただ私が其時々に感じた儘を走り書きにして送るのですから、或は先生の眞意眞相を誤つたり、又先輩のお氣に障る樣なことがないとも限りませんから、此事は豫め御斷りして置きます。云々。

（昭七・五・九）

（二）

よい句は天から授かるものです

或句會の席での先生の話の中に、

よい句は天から授かる樣なものです。餘り苦しんだ時にはよい句は出來ません、却つてすら〳〵と出來たときによい句が多いやうです。

（昭七・五・一二）

（三）

いつか先生が、ある初心の人に俳句の作り方に就て話して聞かせて居られた中に、

兎にも角にも、俳句を作るには、先づ自然を靜かに見つめておいでなさい。すると、初めはたゞ見てゐるばかりでつまらぬ様だが、暫く辛抱して居るうちに、或は風が吹いて來て花がゆれるとか、また蝶々が飛んで來て花に止るとかして、一種の感興が自づから湧いて出る様になる。

そこで其の感興を捉へて十七字の俳句に纏めるのです。

と語つて居られた。私は初心の人を導くに大變分り易い説明だと思つて、一しよに側で聞いてゐた。

（昭七・五・一六）

俳句の作り方

出來るだけ單純化

（四）

或日の句會に、盧子先生の選にもれた一人が、

先生、私は此頃兎角ひねくり過ぎて、句を惡くしていけません。

と云ふと、

先生は、

いくら、ひねくつても惡いことはありません。練るだけ練つて、舌頭に千轉する位でなければいけません。

たゞ同時に、出來るだけ單純にすると云ふことを忘れてはいけません。

と云はれた。

（昭七・六・一）

（五）

或日虚子先生の御馳走で、五六人鳥鍋をつゝいての話の中に、何を感じたか素十が、

こんな氣持のいゝ集りは、先生が死んだら再びあるまいなー。

と云ふと、

先生。

其時になると又自然に出來ますよ、子規が生きて居た時分も、丁度こんなでしたよ。

と云はれた。

（昭七・六・四）

氣持のいい集り

環境がよ過ぎる場合

（六）

吟行などに、先生の御伴をして歩くと、

今日は景色がよすぎて、あまり環境がよ過ぎて佳い句が出來ませんねー。

と云はれることがある。そして、そんな時に限つて、先生は思はぬ樹下石上に姿をかくして、静かに句作をして居られるのを見受くるのであつた。

（昭七・六・一四）

（七）

或人の句に

花こぼれ葉の落ち來る椎の下

河骨の葉に風のあり花になし

とあつたのを先生が見られて、

こんな風に對にして云ふ場合は、よほど旨く云はないと、感じが散漫になる嫌ひがある。

と注意された。

（昭七・六・一五）

（八）

或日の問答。

問　びきする箱苗床のちしやの苗　　水竹居

先生、蜜柑箱やビールの空箱などに土を入れて朝顔の種など蒔いてある、あの空箱の苗床のことを、こんな風に箱苗床と云つて宜しいでせうか。

さうですね、箱苗床と云ふことはまだ聞きませんが、別に名前がなくとも、そんな感じの出る文句を使つたらいゝでせう。

（昭七・六・二二）

（九）

或日の問答。

素十問。

又一つせんべいの蠅五家寶へ　素十

この句は先生の選にもれたが、品の惡いところがいけないんですか。

先生曰。

品もよくないが、それよりも正しい興味でないやうに思はれてとらなかつた。尤も一概には申せぬが。

（昭七・七・一八）

（十）

或日の發行所の句會に、松葉牡丹と云ふ席題が出た。

〆切まで大分時間があるので、素十、青邨、あふひ女史などと、日比谷公園に松葉牡丹の寫生に出懸けた。

寫生に熱心な一同は〆切の三時前に、汗を拭き〳〵發行所に歸つて來て、投句を終つてから、誰かゞ園丁から貰つて來た松葉牡丹の苗屑を出して、

素十は亂暴な奴だ、園丁に斷りなしに花圃の木戸の閂を外して園内に這入つた。

などと面白く話してゐると、側に聞いてゐた素十が、

仕舞つた、その閂を寫生するんだつた。

忘れた閂

と云ふと、あふひ女史が、

わたしも門を忘れた。

と云ふ。青邨が、

僕も

門を開けて覗くや日照草

とでもやる處だつたのに、惜しいことをした。

と云ふ。

すると素十が、

よし、おれが今度どこかの句會で今日忘れた門を使つてやるぞ。

と云つて大笑ひした。

（昭七・七・一九）

（十一）

伊香保に一晩泊りで吟行の途中、汽車の中で、先生が鞄の中から、大毎俳句應募の葉書を一束出して、默々として選句をして居らるゝ。

入選の葉書は僅かに先生の左の手に殘り、落選句の葉書はボトリ〳〵と先生の膝の上に落ちて堆高く積る。

側に見てゐた青邨が、

先生、大變嚴選ですね。

と云つて、落選句の葉書を拾つて見ると、堂々たる俳人の句が幾つも無慚に捨てられてある。

先生、落選句の中に隨分豪い連中の句もありますね。

と云ふと、

落選句

先生曰。

仕方がないですね。

（昭七・八・五）

（十二）

應募の句の中に類句が澤山ある、其場合には双方とも落選になる。

先生、類句でもよい句は其中のよいのを一つ生かして置いては如何ですと誰かゞ云ふと、

先生曰。

類句の出る様な句は別に殘したいと思ふ程の句はありません。

（昭七・八・六）

（十三）

裾を引く赤城は暮れぬ雲の峰　某

餘計な下五字

先生曰。

此句は、暮れの感じは大變よく出てゐるが、雲の峯と云ふ下五字をつけた爲に、新たに別の感じを惹起させる嫌がある。

（昭七・八・八）

一字一感を忽にすな

（十四）

先生曰。

一寸した文字の使ひ工合で、其句が生きるか死ぬるかの境となる、又一寸した感じの相違で其句の活殺の問題となる。

要するに僅か一字の置き工合や、一寸した感じの相違で俳句の活殺を支配することになることがあるから、俳句を作るにはよく落ついて注意の上に注意して作らねばならぬ。

（昭七・八・八）

（十五）

鳰の巣のさはりし指に水上る　夏山

先生曰。

こんな細かい學者の實驗の樣なことまでもして物を觀察して句を作れば、どんな事でも句になる。こんな風に突き進んだ寫生の仕方は、獨り我我ホトトギス俳壇に在る諸君だけの獨得の舞臺である。

（昭七・八・一九）

突き進んだ寫生の仕方

（十六）

徳富蘇峰先生曰。

子規も豪かつたが、今まで生きて居たら、どうなつてゐたか分らぬ。私は俳句の事は分らぬが、人物としては虚子は子規よりも餘程豪いと思ふ。

少くとも其抱容力の大きい點に於て、虚子は子規よりも遙かに豪いと思ふ。

（昭七・八・二六）

虚子は子規よりも豪い

虚子は子規よりも豪い

（十七）

素十問。

月見草莟の先きの花粉かな　素十

先生、この句は「莟の先きの。」としたが「莟の先きに。」と、どちらがいゝでせうか。

先生曰。

「に」の方がいゝでせう。莟の先に花粉があることが、はつきり印象されます。

（昭七・九・一四）

（十八）

城西の清風庵に、蟲を聽く句會の催された日のことであつた。句會が濟んでから、先生に入選句や其他の句につき感想を聞いた。

素十問。

朝顔のしぼみし花の葉に沈み　立子

此句はいゝ句だと思つてとりましたが、先生は御とりになりませんでしたね、いかゞです。

先生曰。

とつてもいゝ句でした。

たかし問。

門内に入れば欅の秋の空　素十

此句は、門を這入つて、空を仰いで、そこに更に新天地を見出した様な心持が、よく描けてゐると思ひますが、いかゞです。

先生曰。

さうです、とりましたが今日の句の中での先づよい句です。

たけし問。

蜻蛉のときゝ光る許りなり　たかし

此句はいかゞです。

先生曰。

描寫が確かでないからとらなかつた。

某問。

唐黍の葉より末枯れはじめけり　たけし

此句はいかゞです。

先生曰。陳。

某問。

巻きあげし簾の下に坐りけり　立子

此句はいかゞです。

先生曰。

これだけでは、趣を成すに足らぬ。

（昭七・九・一六）

（十九）

このあひだの向島百花園の、觀月句會放送の夕のことであつた。

園丁が焚いてゐた雨月の庭の篝が感興をそゝつて、だいぶ寫生の目標となつた。

篝 焚 く 男 立 ち ゐ る 雨 月 か な　晴 子

その夜の少女俳人晴子嬢は、此句の出來たとき、一しよに篝火を寫生してゐた漾人に句帳のまゝそつと見せた。漾人は自分の句

篝 火 に 面 照 ら さ れ て 無 月 か な　漾 人

と比較して、とても敵はぬと思つて、是非この句をお出しなさいとすゝめたが、果して入選した。

其後漾人は會ふ人毎に、我々の樣な腐つた技巧の頭から捻出さるゝ句が、いかに拙いかと云ふことを、つくづく悟つたと語つた。

當夜晴子嬢は、今一つ左の句が入選して、居並ぶ老俳人や歌人をアッと云はせた。

さ は り 見 る 雨 月 の 萩 の 眠 り ゐ る　晴 子

（昭七・九・二六）

（二十）

發行所の卓の上に、子規忌に供へた花芒と鷄頭とが、瓶のまゝ持つて來て置かれてあつた。

數日たつて、芒は枯れ鷄頭は萎みかけた折に、一日この花の側に、先生と二人で話してゐると、不圖先生が何かに感じた樣に、

花が枯れ萎むまで眺めてゐるのは、我々俳人ばかりですね。

と云はれた。

（昭七・九・二六）

取捨は句としての價値によるだけだ

（二十一）

先生曰。

私のとる句を、あまり平凡だとか淡々だとか非難する人があるが、私は、淡々たる句や平凡な句を好んでとるでもなく、又複雜な句をいやで捨てるでもない、たゞ其句が句としての價値如何によつて取捨するのみである。

思ふにこんな非難をする人達は、其人達が平凡と思つてゐる句の中に、面白い複雜な感興が奥深く織り込まれてあることを知らず、また複雜で面白いと云つてゐる句の中に、何一つ纏まつた感興を持ち得ないと云ふことが、まだ分つてゐないからでせう。

取捨は句としての價値によるだけだ

（昭七・九・二九）

行の字よりも吟の字に

（二十二）

或日何かの句會で吟行に行つた時、あちらこちらと歩きたがる私達を虚子先生は戒められて、

誰でも吟行をするとき、吟行の行の字に重きを置いて、一ヶ所に落著いて物を見ずに兎角歩きたがるものですが、追々と作句の力が進んで來るにつけ、落著いて物を見る樣になつて行の字よりも吟の字に重きを置く樣になります。

と云はれた。

（昭七・一一・四）

行の字よりも吟の字に

嵐山吟行

（二十三）

この間京都で虚子先生と一しよに雜踏の嵐山に吟行した折に、先生が私達の側に來て、

こんな景色の好いところでは、餘り感興の深い句は出來ませんが、其代りに何か新しい刺戟を受けて、斬新な感興を持つた句を得ることがあります。

と語られた。

（昭七・一一・四）

（二十四）

或日發行所の句評會で、いつもの通り辨當を喰ひながらの雜談の中に、誰かゞ、

先生、月並と云ふは陳腐と云ふことですか。

と虛子先生に尋ねると、

先生は、

さうですね、まあ陳腐と云ふこともありますが、それよりも寧ろ嫌味のある句と云つた方が近いでせうね。

と云はれた。

（昭七・一一・四）

月並と云ふは

萬葉の歌は客觀寫生の力

（二十五）

先生曰。

萬葉の歌の中に、如何にも調子も高く、情景も鋭く出てゐる歌が澤山ありますが、つまりこれは皆客觀寫生の力から生み出された歌で、いらないものを一つも混へず、眞情一つで詠じてゐるからです。

俳句もこんな風にゆきたいものですね。

（昭七・一一・二六）

萬葉の歌は客觀寫生の力

（二十六）

草田男曰。

子規の時代に俳句を作るに中心論と配合論とがあつた様ですが、どちらが先きに唱へられましたか。

先生曰。

私はそんな事は一向不案内で……。

（昭七・一一・二六）

批評の創作

（二十七）

某曰。

句は餘り上手ではない人で、批評は馬鹿に巧い人がありますね。

先生曰。

あれは作句とは全く別で、云はゞ批評の創作ですね。

（昭七・一一・二六）

（二十八）

或日發行所での漫談の折に、誰かゞ、

先生、子規は「月並」と云ふ言葉を殘し、吏青嵐は「棉入り」と云ふ言葉を殘した樣ですが、先生の言葉としては、後世どんな言葉が殘るでせうか、「深」は「新」なりでせうか、「古壺新酒」でせうか。

と云ふと、

先生は笑ひながら、

さうですねー、どんな言葉が殘るか分りませんが……まあ「花鳥諷詠」と云ふ言葉でも殘りますかね。

と云はれた。

（昭七・一一・二六）

（二十九）

或日玉藻句會の折に、

柴漬の上を流るゝ芥かな　耿陽

漣浪の柴漬に來て分れけり　椎花

双方とも當日の高點句であつたが、芥の方は先生の選に入つて、漣浪の方は入らなかつた。

先生曰。

芥の句は芥が柴漬の上を流るゝと云ふところに新しい著想があるが、漣浪の句は綺麗だが、柴漬に觸れて水が二つに分るゝと云ふ著想が陳腐だ。

（昭七・一二・六）

（三十）

短日の疊替する冬至かなたけし

某問。

先生、此句は季が三つも重なつて、何だかごちや〳〵してゐるやうですが。

先生曰。

季が重なつてゐても、其中のどこかに、しかと纏まつた感興を捉へて居ればよいのです。

此句は、短日の中の最も短い「冬至」の日の疊替の氣分を強く云ひ現はしてゐるところがよいと思ひます。

（昭七・一二・九）

纏まつた感興を捉へること

初心者の句

（三十一）

或る句會の折に、初心の人の句が澤山先生の選に入つて喜んでゐると、先生徐ろに口を開いて、

初心の人の句は、うぶでまざり氣がないからとれます。

段々分つて來るにつけ、平凡になつて倦怠の心が起ります。

そこを突破すると、更に句境の新天地が眼前に展開して來ます。

そんなことを幾度も幾度も繰返して行くうちに、自然に上手になれます。

と云はれた。

（昭七・一二・一二）

よい文章や句が自づから出來る

（三十二）

よい文章や句が自づから出來る

先生曰。

文章を書く時でも句を作るときでも、始めから文章を書かう句を作らうと思つて景色や事柄を觀てゐると、兎角見樣が無理になつて、よい文章も句も作れません。

無邪氣に觀てゐる裡に面白いと思つたところを見つけて、それを文章に書き句に作ると、自づからすら〳〵とよい文章や句が出來るものです。

（昭八・一・一九）

（三十三）

水鳥の爭ひ搏ちし羽音かなたかし

句の力

某問。

先生、此句は少し陳腐ではありませんか。

先生曰。

此句は、句の力で採りました。描寫が活躍してゐます。

（昭八・一・二四）

（三十四）

或日の玉藻の萬葉會の折に、

羈旅發思

のとの海に　つりするあまの　漁火の
　　ひかりにいゆく　月待ちがてら

先生曰。

「漁火のひかりにいゆく」と云ふは、いゝ氣持ですね。

某曰。

「いゆく」の「い」の字が大變きいてゐて、月待ちがてら濱を歩いてゐる氣持が、いき〳〵と出てゐますね。

先生曰。

眞似たくはありません

しかし、眞似たくはありませんね。

（昭八・二・三）

（三十五）

草田男曰。

初御空八咫の烏は東へ旭川

先生、私達はこんな場合に、たゞ烏が東へ飛んで行くと云ふことだけに感興を持つて、八咫の烏などと云ふ古事には餘り深い感興を持ちませんが、いかゞです。

先生曰。

老人は例へば川の東を江東と云ふ樣に、漢字の形容詞を使つて喜ぶ癖がある。

この句の場合にも、元日の空に烏が東へ飛んで行くのを見て、遠く神代の昔を偲び八咫の烏など云ふ古字の形容詞を使つて元日の感じを莊嚴にして喜んでゐるのであるが、その爲に花鳥諷詠の寫生的實感は少しも損じてゐない。つまり見方によつては年寄の俳句にそれだけの餘裕があると云ふことも云つてよい。

（昭八・四・一）

（三十六）

先生曰。

文章でも俳句でも、描寫が巧みに出來る樣になつてから、今一歩突き進んで老境に入らねばいけません。老境と云つても老人になれと云ふ意味ではない、古い言葉で云へば寂寞枯淡とでも云ひますか、つまり自づから枯れ切つてくることですね。

（昭八・四・五）

（三十七）

或人曰。

先生、和歌と俳句とは一しよに作れませんか。

先生曰。

子規の時代には、私達も隨分俳句と和歌を一しよに作つたものですが、勿論出來ないことはありませんが、しかし行き方が少し違ひますから、どちらかと云つたら一つの方がいゝやうですね。

（昭八・四・一二）

（三十八）

某問。

先生、少年の作つた俳句を見ると、其純眞さにどれも採りたくなりますが、本當にいゝんですか。

先生曰。

少年の俳句は、純眞は純眞だが、深みがありません。矢張り少年俳句は少年俳句として、別に取扱つた方がいゝ樣です。

（昭八・四・一七）

（三十九）

先生曰。

誰しも自分が大變苦しんで作つた句には必ず未練がある。ところが、餘り苦しんで出來た句にはその割に佳い句はない。自然に天籟の如く響いて出來た句に本當な佳い句がある。ところがその天籟の如き響きは、矢張り一向修錬の力に俟つ外はない。

（昭八・六・五）

（四十）

蛇のひげに實のなつてゐし子供かな　草田男

某問。

先生、此句はどこがよいですか。

先生曰。

此句は蛇のひげの中に青い實を見つけたときの、子供の嬉しい氣持がよく現れてゐます。

（昭八・六・一〇）

（四十一）

先生曰。

入選しても入選せんでも、いつも同じ顏してよく句會に出て來る人は、將來必ず大成する人です。私はこんな眞摯な態度の人を心から歡迎致します。

（昭八・七・二八）

（四十二）

水やれば稗蒔の江のあふれけり　漾人

失敗の句

某問。

先生、此句はどこが悪いですか。

先生曰。

「稗蒔の江」と云ふことも少々無理ですが、それよりも全體として餘り複雜なことを云ひ了せんとしたのが失敗です。

（昭八・七・三〇）

（四十三）

この間の句評會の席上で、

一と夕立ありたる街のながしかな　風生

と云ふ句の句評の番に當つて、花蓑さんが頻りに汗を拭きながら考へ込んでゐると、側から先生が、

若い人達の新しい句は一寸見ると句評が六かしい樣で反つてやさしくて、こんな平凡に見ゆる老練な人の句の方が六かしいんですよ。

と笑ひながら云はれた。

（昭八・八・一一）

（四十四）

この間の武藏野探勝句會の後で、誰彼は零だ誰彼は何句入選だなどとはしやぎ合つてゐると、

先生側から、

入選よりも互選

諸君は、私の選に入ることばかり考へずに、もつと廣く御互の選に入ることをも考へて頂きたい。

誰がどんな句をとつたかと云ふことは大變興味あることですよ。

と云はれた。

（昭八・八・一一）

（四十五）

はひまとふ葛にはげしき夕立かな　青邨

先生曰。

この句は、人も通らぬ山路にはげしき夕立の降りそそいでゐる景色がよく出てゐると思ふ。

（昭八・一・七）

（四十六）

月さして忘れ扇の疊かな　巨陶

先生曰。

こんな句の出來る境地が羨しい。

月さしてもいゝが、疊かなの下五字が餘裕があつてよい。

（昭八・一〇・七）

（四十七）

或る場所で若い女學生が先生の側に來て、

先生、童謠と俳句のことに就て少しくお話を伺ひたいのですが。

と云ふと、

先生曰。

私は童謠のことは少しも分りませんから……。

（昭八・一〇・一〇）

（四十八）

誰かゞ、

先生の劇評を面白く拜見しました。

と云ふと、

先生曰。

あれは劇評と云ふよりも、寧ろ芝居の敍景文の樣なものですね。

（昭八・一〇・一〇）

（四十九）

この間山會のあとで雜談に耽つてゐると、

先生曰。

お能の狂言などに、よくそんな心持が現はれてゐると思ひますが……。

私は世の中ををかしく笑つて暮したいと思ひます、つまり世の中を滑稽に觀て……。

某問。

先生、その滑稽と云ふは、つまり俳諧の原始時代の、あの滑稽味の樣なことですか。

先生曰。

違ひます、……もつとずつと上品な滑稽味ですね。（昭八・一一・二八）

（五十）

某問。

先生、今日の子供が雀を逐ひ廻してゐる先生の寫生文は、何か寓意でもあつてお書きになつたんですか、それともたゞの寫生ですか。

先生曰。

別に寓意などあつて書いたんではありません、つまりあなたが「還暦」を書かれたのと同じ氣持で書いたんです。

文章でも俳句でも、あまり題や何かに卽き過ぎるといけません。そんなものには不卽不離で、あとは讀者の感じに任せた方がいゝと思ひます。

（昭八・一一・二八）

（五十一）

どうかして　皇太子殿下御誕生の御祝の句を作らうとして、幾つ作つて先生に見て頂いても物にならぬ。

先生曰。

慶弔の句は、中々作り惡いものです。一體主觀になりがちの上に俳句は歌の樣に物をかりて云ふ譯にゆかず、それに季が入るので益〻六かしくなります。

（昭九・一・二三）

（五十二）

山會が濟んだあとで、色々雜談に耽つてゐる時、自分が作つた文章の材料に就いて、いろ〳〵話をしてゐると、默つて聽いてゐられた先生が、

今一歩突込んで

いまあなたが面白さうに話して居らるゝ通り、いま一歩思ひ切つて突込んでお書きになると、一層興味ある文章が出來ますがね。

と云はれた。

（昭九・一・二三）

（五十三）

某問。

先生、近頃聯句の影響でせうか、同一人が同じ題の句を五つ並べて發表することが大分流行して來た樣ですね。

先生曰。

流行と云ふ程でもない樣ですが、偶あつてもあれはたゞ同じ題の句を四句か五句並べたゞけで、聯句とは違ひます。

聯句とは違ひます

某問。

ですけどあゝして並べてあると、前後の句が互に興味を助け合つて、一句離して見るよりも優れて見えることもある樣ですが。

先生曰。

聯句とは違ひます

聯句とは違ひます

それも句によりけりですね。立派な句は前後の援をからずに獨立してチャンと立派に見えます。

（昭九・二・七）

（五十四）

前書附きの句

某問。

前書がなければ分らぬ様な俳句は、俳句としての價値はないと思ひますが、如何です。

先生曰。

嚴格に云へばさう云つた方が正しいと思ひます。たゞ昔から前書附の俳句が許されて俳句の中に存在してゐるので、まだそのまゝになつてゐるのでせう。

（昭九・二・七）

（五十五）

或日の山會の後で、

先生曰。

近々改造社から私の全集を出すことになりました。

某曰。

それは結構ですね。私達も先生の還暦を好機として、これまでの先生の全集が欲しいと思つてゐました。

先生曰。

私は全集は嫌です、選集にしたいのです。だけど本屋の方で是非全集と云ふ希望ですから、仕方なく承諾することにしました。

ところが全集と云つても、私はホトトギスに載せた以外に自分の作つたものを、あまり手元に持つてゐませんので、今俄かに人から借りたりなんかして、こんなに集めてゐます。

と云つて風呂敷の中から二三冊古い本を出して見せられた。

（昭九・二・二〇）

（五十六）

竈の火燃えてをり山焼けてをり　橙黄子

某問。

先生はいつか、對照の句で成功するのは少ない様なお話があつた様に覺えてゐますが、此句の場合には如何です。

先生曰。

それも、句によりけりですね。此句の場合には、竈の火と山焼の火との對照がよく出來てゐます。山家の風景がよく描けてゐます。

（昭九・二・二〇）

（五十七）

或日の句會の後で、初心の人が、

先生、俳句は大變六かしくて、天才の人でなければ上達しない様に思はれますが、如何です。

と云ふと、

先生曰。

俳句は天才でなくとも勉強さへすれば出來ますよ。但これは俳句に限らぬ様ですが。

（昭九・三・一）

（五十八）

去來と其角

某問。

芭蕉のお弟子の中で、去來は優れた天才の人でしたか。

先生曰。

別に天才の人であつた樣にも思へません。漢學の素養は多少あつた人の樣ですが、矢張り眞面目に勉强して句を作つた人の樣に思はれます。

某問。

其角は如何です。

先生曰。

あの人は去來と違つて、天才肌の人です。奇拔な句を作つた人です。しかし句はあまり感心しませんね。

（昭九・三・一）

（五十九）

本格の寫生句

或日丸ビル八階の集會室で發行所句會が催された後で、先生と二人で廊下を歩き乍ら、

先生、今日の樣な大勢の句會で、いつも先生が選られた句と、皆が選る句とは、大變違ひますね。

と云ふと、

先生曰。

それは皆の見方が或る一個處に止まつてゐて、その先き今一歩突き込んだ本格の寫生句を見る力が足りないからですよ。

と云はれた。

（六十）

或日の山會の後で、皆が、今日の君の文章はあれは嘘だらう、いやあれは寫生だよ、大體本當だよ、などと語り合つてゐると、

先生側から、

嘘でも作り事でも、興味が充實してさへゐれば少しも差支へはありません、立派な藝術です。

たゞし其場合に嘘が本當同樣の興味を持つて、作者の頭から湧き出て來なければいけません。

（六十一）

或日何かの折に、

先生、此頃大變俳論が盛んになりましたね。

と云ふと、

先生曰。

私達の若い時分はもつと盛んに議論をやりましたよ。

しかし私は其時分から、自分の體驗したことを述ぶるまでのことで、別に理窟を考へて議論をしたことはありませんでした。

と云はれた。

悉皆成佛

（六十二）

平常悟りじみたことや坊主臭いことは滅多に云はれぬ先生が、どんなはづみでか、こんな風に坊主臭い言葉で云はれたことが私の手帖に書きとめてある。

先生曰。

俳諧の功徳は實に無量無邊です。一度でもこれに觸れたものは、必ず成佛します。

悉皆成佛

（六十三）

この間の家庭俳句會に枇杷と云ふ題で、

海　近　し　家　皆　低　し　枇　杷　の　花　　風　木

と云ふ句が大分高點であつたが、先生の選には漏れた。後で先生に此句はどこが惡いですかと伺つて見ると、

あまり説明的でいけない。句は、その句を見たとき、其句の出來た場處の光景がパッと頭にも胸にも浮ぶ樣でなければいけません。説明的の句ではそんな感じを起しません。

（昭九・七・四）

説明的ではいけない

説明的ではいけない

描寫が不充分

（六十四）

水竹居問。

芭蕉林道の上にも湧く清水　草餅

芭蕉林道にも清水湧いてをり　水竹居

先生、此間歸國の際、江津花壇の芭蕉林で、圖らずも二人でこんな同じ樣な句を作つたのですが、これであの芭蕉林の氣持が出てゐるでせうか。

先生曰。

道の上にもとか、道にもとかだけでは、あの一面に綺麗な清水が湧き出てゐる芭蕉林の光景は充分に寫し出されてゐませんね。

（昭九・七・四）

描寫が不充分

眞實をよく寫し出さねばいけません

（六十五）

先生曰。

俳句でも文章でも、自己の眞實をよく寫し出さねばいけません。

自己の眞實ばかりでなく、その時代の眞實をもよく寫し出さねばいけません。

（昭九・七・一一）

眞實をよく寫し出さねばいけません

（六十六）

のこし來し子ほどに遠き蟬の聲　汀女

某問。

先生、此句は昨日の同人句會の選には漏れましたね。

先生曰。

そんな句がありましたかね、それは見落しました。……（暫く考へられて）……汀女さんらしい句ですね……（又暫く考へられて）……汀女さんの句ですね……。

某問。

昨日の選句の中に追加しても差支へありませんか。

先生曰。

差支へありません。

（昭九・七・一一）

（六十七）

客觀寫生は恐らく一番六かしい文學

或日の山會の後の雜談の中に、

先生が、

客觀を模寫しつゝそれに主觀がにじみ出てゐるのが最高の文藝ですね……私はさう考へる……。

と力强い語氣で語られた。そして尙言葉をついで、

客觀の面白味を會得してゐる人は、本當に尠いですね……客觀寫生の文學を世間では容易な文學と云ふが、恐らく一番六かしい文學でせう。

と云はれた。

（昭九・八・二一）

（六十八）

主觀の臭ひがすつかり取れて仕舞はねばいかん

此前の山會の私の文章「鉢の木」を評して、

先生曰。

水竹居さんも稍寫生文らしいものが書ける樣になりました。いま一と勉强して人間生活そのものを自由に寫せる樣になるといゝです。

それには、悲しいとか、嬉しいとか云ふ主觀の臭ひが、すつかり取れて仕舞はねばいけません。

（昭九・八・二一）

主觀の臭ひがすつかり取れて仕舞はねばいかん

誤解されるのも一種の興味を以て迎へる

（六十九）

私が先生に、「東京便り」の記事に萬一先生のことを誤り傳へはせぬかと、それが一番心配ですと云ふと、

先生曰。

私は人から誤解されるのを、人にはあんな風に見えるか、あんな風にもとられるかと一種の興味を以て見てゐます。つまり誤解は誤解として一種の興味を以て迎へてゐます。

と微笑された。

（昭九・八・二一）

信ずる道を正直に歩んで行けばいいです

（七十）

先生曰。

人生百年の後の批判は、結局落著く處に落著きますね。つまり自分の信ずる道を正直に歩んでさへ行けばいゝです。

（昭九・八・二一）

山會の文章全滅

（七十一）

此間の山會で龍男、水竹居、虚子、草田男、青邨と云ふ籤の順序でそれぞれの文章を讀み上げた。久しぶりに出した龍男の文章が眞つ先きに落第した、次に水竹居の文章も後半が拙いと云つて首足兩斷にされた、其次に草田男のも書かんとしてゐる點は分つてゐるが今一度書き直しと云ふことになつた、最後に青邨のもお尻の結び方が惡いから書き直せとの評定になつた、そして先生の文章も草田男其他から多少の質問が出て私も書き直しませうと云つて引込められた、それで山會の文章がみんな全滅になつた。

（昭九・一〇・五）

作者の個性がにじみ出る樣に書くのがいゝです

（七十二）

前の山會のとき虚子先生が私を誠めて云はれた言葉の中に、

あなたのこの文章は前半に二ヶ所ばかりあなたの個性がよく描けてゐます。こんな風に作者の個性がそのまゝにじみ出る樣に書くのがいゝです。……ところが稍もすると理窟や説明やお説法じみたことまでが躍り出勝になつて來るのがいけません。

（昭九・一〇・五）

作者の個性がにじみ出る樣に書くのがいゝです

（七十三）

客觀を通して主觀がにじみ出てゐる

先生曰。

世間では私が此頃作る句や、雜詠などに採る句を、主觀傾向の句が多いと批難してゐる人もある樣ですが、そんな句は、皆一度客觀寫生を通して主觀がにじみ出てゐるので、始めから主觀で出來てゐる句は一つもありません。

（昭九・一〇・二一）

（七十四）

客觀寫生で押し進んで來た

先生曰。

私は初めは殆んど主觀一方で句を作つて居ましたが、早く客觀寫生に目覺めた爲に今日あるを得ました。もし私が主觀の儘進んで來たら、とつくの昔に行き詰つてゐるところでした。

（昭九・一〇・二一）

今日の議論は皆昔のむし返し

（七十五）

先生曰。

私が餘り物を言はぬので、世間では殊更に私が議論を避けてゐる樣に思つてゐる樣ですが、私は議論は既に仕盡して、今更同じ樣な事を繰返す必要がないから、默つてゐるのです。つまり今日の議論は、皆私達が昔遣り盡した事を、繰返してゐる迄の事です。

（昭九・一〇・二五）

師を信ずるが修業者の道

（七十六）

先生曰。

色々と俳句の議論をしてゐる人達の爲に、說くに說かれぬ事もありませんが、誤解を重ねたりする結果となつて、却つて說かぬ方がいゝです。俳句ばかりでなく、何んでも本當の極處は說くの聽くのと云ふよりも、只師を信じて學ぶより外はありません。それが修業者の道だと信じます。そして修業を積んで、師以上の力を得た時に、師たる人も世間も、自然と其人を押す樣になります。私もそんな人が早く私の門下から出るのを樂しんでゐます。

（昭九・一一・一七）

（七十七）

雜詠選の態度

先生曰。

私のホトトギスの雜詠欄は、俳句の修業道場です。卷頭句は、其中での最も力のこもつた句で、しかも俳句として出來上つた句を選むのです。私は決して輕佻浮薄な選み方をしてゐるのではありません。

（昭九・一一・一七）

（七十八）

俳諧四十餘年の感應

先生曰。

俳句の善惡は中々説明できません。たゞ私がこれはよいと思つて採つた句は大概善い句の樣です。そんな句は必ず全體がよく調つてゐるか又寫生の眞の道に適つてゐるか、又は句に力が籠つてゐるか何れかの結果で、見てゐる裡に自然と感興を深めて來る句です。つまりそんな感興は中々説明出來ません。これはたゞ私が俳諧四十餘年の體驗から自然に感應する一つの感じとして認めて頂くより外に仕方はありません。

（昭一〇・二・五）

（七十九）

俳句の精進者

某曰。

先生、この正月は何時になく句會が盛んでしたね。その中に出席も多く入選句も多かつたのは、あふひさんとたけしさんださうです。あふひさんは十三回出席、入選句三十七。たけしさんは十一回出席、入選句三十二、三。と云つて居られます。

（昭一〇・二・五）

（八十）

句會の選句を重く見過ぎぬ様に

先生曰。

皆さんが餘り私の句會の席上の選句に重きをおき過ぎてゐるので困ります。席上の選句は其時見落した句をあとで見て成る程と思ふ句もありますし、また其時採つた句の中でも、あとで見てそれ程とも思はぬ句もありますから、句會の席の選句は餘り重く見過ぎぬ様にして頂き度いです。

（昭一〇・二・五）

見た時の感じが強く出る

（八十一）

この間の植物園の句會に、

霜除に立てたる札は濱おもと　たけし

先生曰。

この句は「札立てあるは」とした方が見た時の感じが強く出る。

（昭一〇・二・五）

見た時の感じが強く出る

天明元祿時代の寫生句をもよく見るがよい

（八十二）

先生曰。

寫生と云ふことは、天明元祿の俳人達に敎はつた點もありますね。天明元祿あたりの句に、實際感心する句は少なくありませんよ。少し讀んで御覽になつたらいゝでせう。

（昭一〇・二・五）

天明元祿時代の寫生句をもよく見るがよい

よい調子は不斷の緊張から出る

（八十三）

先生曰。

俳句は全く其日の調子で、出來不出來がありますよ。今度こそと緊張して苦吟した結果、必ずしもよい句を得られるとも限りません。全く其時の調子です。しかし、其調子と云ふものが、不斷の緊張がなくては出て來るものではありません。

（昭一〇・二・五）

人生は修業の生涯

（八十四）

或日、百花園の句會に行く自動車の中で、先生が突然私に、

あなたは今のところ、俳句と謠とは、どちらが面白いですか。

と問はれた。

私は、

さうですね、どちらもまだ面白いと云ふ域には達しませんね、まあ苦しい最中ですね……。だが人間の生涯は畢竟修業の生涯ですから、こんな風に苦しむ中に自づから樂しみがありますね……。

と云つて、二人は顏を見合せて笑つた。

（昭一〇・四・五）

自己の天地を開拓せよ

（八十五）

或日發行所で山なす雜詠を前にして、

先生曰。

こんなに澤山句を作る人はありますが、この中で本當の詩人と云ふべき人は五指を屈するにも足らぬほどです。そしてその人達は何れも優秀の作家です。その人達は各自獨得の天地を持つてゐます。その天地は他人が眞似ようとしても出來ません。つまり他の人達は又他の人達で、こんな先輩に學びながら自己の個性と環境に應じて、自己の天地を開拓せねばなりません。

（昭一〇・四・五）

應化自在

（八十六）

或日のこと發行所の机上に山と積まれた地方の俳誌を見乍ら、

先生が、

發行所にこんなに澤山俳句の雜誌が來ますが、この中に私の事を佛樣のやうに書いてゐる雜誌もあれば、鬼のやうに書いてある雜誌もある。

私の顏は佛にも鬼にも見えるですかね。

と云はれるので、

私は、

つまり應化自在と云ふ譯ですね。

と笑ひながら答へた。

（昭一〇・五・二二）

もつとよく桐の木の性質が現れる

（八十七）

差し交す靜かな枝や桐の花　　橙黄子

もつとよく桐の木の性質が現れる

先生曰。

此句は中七を「大きな枝や」とした方がもつとよく桐の木らしい性質が現れるやうな感じがする。

（昭一〇・五・二二）

平凡な道から進むがよい

（八十八）

某問。

欅のたけしさんの句は、總じて無理がなく、すら〳〵と出來てゐて分りよくて好きですが、段々お弟子も増えてゆく樣で結構ですね。

先生曰。

さうです。但句によつては稍平凡になり易い嫌もありますが、何れかと云へば、初心の人はこんな平凡な道より進んだ方が無難ですね。

（昭一〇・六・二四）

平凡な道から進むがよい

作意が一貫してゐなければいかん

（八十九）

或日の座談會の折に、稍力を籠めて云はれた先生の言葉の中に、

一體俳句でも文章でも、其作品を貫ぬく作者の作意が確つかりしてゐなければいけません。丁度鐵の棒で突ぎさした樣に確と前後を貫いた作意がなければ面白くありません。

例へば昨日實生會で見た「狐塚」の狂言でも、臆病な太郎冠者を狐の出る田に鳥追にやると云ふ滑稽な作意が狂言を一貫してゐるので面白いですね。

（昭一〇・六・二四）

作意が一貫してゐなければいかん

私は自分の事は自分で解決する

（九十）

虚子先生の病後の述懐の中に、

先生曰。

私は自分の事は結局自分で解決せねばならぬといつも考へてゐます。

病氣の時なんか苦痛をこらへながら一層深くそんな事を感じます。

（昭一〇・八・七）

私は自分の事は自分で解決する

（九十一）

或日先生と僅か四人で句を作つてゐる時、

先生、今日はいつもの様な句會氣分でなく、本當にゆつくり句を作りませう。

と云ふと、

先生曰。

私は大勢の句會の時でも、一人で句を作つてゐる時でも、いつも同じ氣分で句を作つてゐます。

（昭一〇・八・七）

いつも同じ氣分で句を作つてゐる

（九十二）

先生曰。

近來俳句も愈々世界的になつて來て、その爲に季題の問題なども益々複雜にはなつて來たが、同時に俳句が愈々日本獨得の文藝だと云ふ感じが、ますます深くなつて來るのが嬉しい。

（昭一〇・八・二四）

俳句は日本獨得の文藝

小言を云はるゝ様になれば逃げる

（九十三）

先生曰。

俳句でも謠でも、初心のうちに褒めらるゝ間は、みんな喜び勇んで稽古をするが、少し進んで小言を云はるゝやうになると、だん〳〵止める人が多くなる。その實敎へる方では小言を云つてもいゝやうになるまでに仕上げるのを樂しみに敎へてゆくのに、世の中のことは中々まにならぬものです。

（昭一〇・八・二四）

先生の二大煩惱

（九十四）

或日百花園の句會に行く途中の自動車の中で、

某曰。

先生、あなたは所有慾がないと云はるゝが、あなたは大きな所有慾を二つ持つてゐますよ、申しませうか。

第一あなたは子を持つ親として日本一の子煩惱です。第二にあなたは多數の門弟を持つ花鳥諷詠の師として頑强な執著者です。あなたはこの二大慾の爲に他の一切の下らぬ慾を放擲して居らるゝまでのことです。

とまくしたてゝ云ふと、先生別に嫌な顏もせずに、

さう云はれゝばさうかもしれません。

と云はれた。

（昭一〇・九・一〇）

（九十五）

一茶の脚本を書かれたあとで、

先生曰。

私は芝居の脚本は今度初めて書いたのですが、芝居の脚本は、それを演出する役者の演技と脚本の作者の文藝とが、色刷のやうに互に織込まれて立派な芝居になるべきだと考へます。つまり脚本と云ふものは讀んで面白いものでなく、演出された芝居を見て面白くなるやうに書くのが本當だと信じます。

（昭一〇・九・一六）

（九十六）

先生曰。

私は一茶劇の中に幾分か能狂言の様な滑稽味を持たせ度いと思つてゐましたが……。

某曰。

先生は滑稽味と云ふことをよく云はれますが、私も此頃其意味が少し分りかけて來ました。

俳句はもと〳〵人間の寂とか眞とか或は近頃の人のよく云ふ宗教だとか云つた様な、眞面目な堅くるしい方面ばかりでなく、微笑の天地卽ち滑稽味の要求からも生れたもの丶様に思はれますが、先生の花鳥諷詠もそんな餘裕のある滑稽味を含んでゐると考へてい丶でせうね……。

先生曰。

さうですね。つまり自然の要求ですね……。和歌の方面に宗鑑などが俳句を始めたとき、一方に時を同じうして能樂の方に狂言が生れ出ました。どちらも當時の社會の自然の要求から生れたんでせう……。

（昭一〇・一一・七）

（九十七）

先生と並んで辨當を食べてゐると、某がみな食つてしまふうちに先生はまだ半分も食べてゐられぬ。

先生、おそいですね。

と云ふと、

先生は笑ひながら、

私はよく噛んでよく味はつて呑み込みます……。あなたは、いつも話に夢中になつて、ろくに噛みもせずに呑み込まれますので早いですよ。

と云はれた。

（昭一〇・一一・二九）

あなたはろくに噛みもせずに呑み込むから悪い

（九十八）

此間の學士會での草樹會の翌日、

某曰。

先生、昨夜の草樹會に草田男がこんな句を作りましたよ。

返り花三年教へし書に挿む　草田男

先生曰。

草田男もそんな素直な句を作るやうになつたのは一段の進歩ですね……。

想はあつても、とかく描寫に無理なところがありましたが……。

（昭一〇・一一・二九）

（九十九）

廣く世間の文壇に堂々と乗り込んでは如何です

此間の座談會で、皆が雑談をしながら辨當を頂いてゐる折に、

先生曰。

皆さんもホトトギスばかりに立て籠つて居らずに、廣く世間の文壇に堂々と乗り出して行つては如何ですか……。

世間では諸君の多年鍛練された客觀寫生の俳句に基づいた俳文藝を一般的に理解し、且つ歡迎してゐる風が見えて來ましたよ……。

某曰。

何はさて置き、先づ先生が思ひ切つてお出になる事ですね。

先生曰。

私はこれで隨分諸君に劣らぬ闘志もあり稚氣もあるつもりですが、何分六十二三と云ふ年になつては、稍日暮れ道遠しです。大いに諸君の御健闘を祈りますよ……。

と云つて朗らかな笑顔を見せられた。

（昭一〇・一二・一六）

（百）

もとの月並に歸ります

某曰。

先生、百年の後には我々の俳句は一體どうなるでせうか。

先生曰。

再びもとの月並に歸りますね。

（昭一〇・一二・一七）

（附　記）

虚子先生と私

虚子先生と私とが直接に面接する様になつたのは、この東京驛前の丸ビルが落成した頃の大正十一年であつた。云はゞこの丸ビルが虚子先生と私の媒人である。そしていよ〳〵俳句のお弟子入りをしたのは、それから二、三年あとの大正十四年のことであつた。

ところが私が虚子の名を慕ひ、いつかは此人に接して見たいと思つてゐたのは隨分古いことで、今から四十餘年前の昔、日清戰爭以前、虚子先生は京都の第三高等學校に、私は熊本の第五高等學校に、共に學生時代のことであつた。

其後虚子先生は仙臺の第二高等學校に轉校されて、其後東京に移つて一躍子規などと一緒に俳壇文壇の革新運動で堂々と名を知られた新興の青年文士となられたが、私

は熊本の高等學校にゐながら柄にもない和歌や文章に興味を持ち、遙かに帝都の子規虚子一派の俳壇文壇の革新運動に注意してゐた。

私は當時彼等が唱導する俳句や和歌は餘りに新し過ぎて賛成出來なかつたが、虚子の文章だけは頗る興味を感じて愛讀した。しかもその虚子は高等學校在學當時授業にも出ず、始終句拾ひと稱して郊外の田圃をうろついてつまらぬ先生の講義よりも寧ろ大自然と親しんでゐると聞いて其風懷が慕はしくて、機會があつたら一度是非會つて見たいと思つてゐた。

其後私も東京に出て大學に入るとき、文科を志望して父から「文學などは餘技だ、治國平天下の學をやれ」と叱られて政治科に轉向したが、大學在學中は始終白川鯉洋や田岡嶺雲などの文士とのみ親しく交際し、大野洒竹にも同郷の關係で一寸會つたこともあるし、大町桂月、齋藤綠雨などとも嶺雲、鯉洋などと一緒に度々會つたこともあつたが會ひたいと思つてゐた虚子には一向に面接の機會がなかつた。

その後大學を出て三菱に入り、一時青邨の郷里の岩手山麓の小岩井農場に五、六年間淋しい農場生活を送つてゐたが、その折二三の場員その他地方の俳人達と一緒に俳句を作り始めた。當時虚子の名はホトトギスよりも寧ろ國民俳壇の方で普偏的に世間に知られてゐたが、私は國民俳壇の俳句よりも、鳴雪の萬朝俳壇の俳句の方が分り易くて面白かつたので、虚子、鳴雪と同郷の私の同社の友人船田一雄氏を介して鳴雪翁の門に入つて三、四年間俳句を見て貰つてゐた。

その後東京に歸つてから忙しくて俳句を作る暇もなく鳴雪翁にも失禮してゐたが、丸ビルが落成して愈々開館となつた折に、イの一番に申込んで來た店子の中に俳人虚子があつた。私はこれは有難い人が飛び込んで來た、一風變つた店子で面白いとは思つたが然し牛込の船河原町の自分の家に事務所を構へて、箱火鉢を撫でながら日本机に向つて俳句の選をしてゐる人が、この文明の尖端を行く丸ビルの中に飛び込んで來て、第一家賃は高いし總てが洋式で種々不便な事もあらうし、あとで後悔されてはと

思つて一應私が親しく會つて話した上のことにしようと、前記の船田氏や、虚子のお能友達で當時三菱建築技師長の櫻井博士を介して一日私の事務室に足を運んで貰ふことにした。

會つて話をして見ると、何事もよく分つた確つかりした頼もしい人で、言葉少ない中によく要領を得てゐる。私はこの人ならば大丈夫店子としても心配無用と太鼓判を捺して係りの方に廻して、早速部屋を貸すことにした。その時私が始めて虚子先生に會つた時の感じは、十數年後の今日も少しも變りはない。

その後東京は彼の恐しき大震災の爲殆んど全滅の悲慘をなめ、我々も丸ビル其他で非常な苦勞をしたが、稍心も落ちついた大正十四年の秋に私は當時虚子門下に巾を利かしてゐた秋櫻子、素十の兩君を介して正式に虚子門下の老書生となつた。

爾來十數年間それこそ降つても照つても虚子先生の顔を見ない日はないと云ふ位に親しくして今日に至つたが、今では先生と云ひ弟子と云ふよりも寧ろ御互に老後の友人（先生と私は同じ明治七年生れの相年で）として相許す樣な仲となつて仕舞つた。

あひ年の先生持ちて老の春　水竹居

昭和十一年三月

赤星水竹居

（虚子先生のお留守の間に此の木が出來たのですが、折柄帝都に二・二六事件が勃發して大變な騒ぎでした。この手紙は、其状況を洋行中の先生にお知らせしたに對して、先生から御返事が來たのですが、記念の爲め茲に掲げます。）

虚子先生へ

香港の二十八日の消印のある箱根丸船中お認めの繪葉書並にペナンお著前の無線電信いづれも有難く拜誦、お二人とも無事御航行何よりの安心です。

お葉書の文句によれば、東西探梅句會の放送がよく聽えなかつたさうで、先生ばかりでなく私達も誠に殘念に思ひます。

二十五日の晩先便の通信を書いたその翌日、すでに御承知の通り我帝都に一大擾亂が起りました。その事はすでに途中の新聞や通信その他で詳しく御承知の事と信じますから、詳しい事は省きますが、何しろ一時上下は膽をつぶす樣な心配事でした。

その時分東京は、東西探梅句會放送日即ち二十三日の大雪が一時止んで、それからまた降り出

して、手紙を書いた晩も窓外にシト〳〵と降つてゐる雪の音を聞きながら、この分ではまた積るぞと心配して寢みましたが、翌曉慌たゞしき電話の音で起されて、寢衣のまゝ電話口に立つと會社の非常係から、「今曉未明に機關銃を持つた軍隊が首相、藏相、陸相、内大臣などの官邸私邸を襲撃し、これ等の人達を慘殺し、同時に首相官邸、警視廳などを占領し、宮城をも取卷いて、丸の内は全部この暴動軍の手に歸した」との途方もない出來事の電話があつたので、私は餘りのことに多少のデマかとも思つて早速心當りの同僚の家に電話で問合せて見ると、その家が丁度齋藤内府邸の近くで、たつた今大騒ぎがあつたとの返事だつたので、これは大變と私は直ちに非常警戒の電話をそれ〴〵の部署にかけた上で、急いで支度をして丸の内に出かけました。途中二ヶ所に立寄つて、丸の内に這入つたのは午後の二時頃になりましたが、この日は警視廳、首相官邸などを占領した反軍と宮城を警備してゐる兵とが櫻田門日比谷方面で睨み合つてゐる狀態であつたが、宮城を護つてゐる近衞兵も宮城を取卷いてゐる反軍も相對してはゐるが何だか八百長らしい樣子も見えてをかしな光景でしたが、私達はいろ〳〵のデマの飛ぶ中にこの樣子では案外無造作に軍隊の目的を達せられる樣になるかもしれぬ、從て帝都は砲彈流血の騒ぎからは或は免かるゝかもしれぬが、國家の將來に對しては何だか薄氣味惡い暗雲に閉されてゐる樣な感じをしつゝ、各社とも社員は早退けさして、宿直夜警を增員して私はいつもの通り深澤の家に歸つた。そして

その晩は電話機の下に床を敷かして寢んだが夜中に起さるゝ樣な事もなしに夜は明けた。

その翌二十七日はいつもより早く出勤したが、形勢は昨日の睨み合ひ續きの姿で進んでゐる裡に、結局戒嚴令が布かれて、段々と敵味方の區別が少しづゝ判然と見えて來て、そのうちに警視廳を占領してゐた反軍は建築中の議事堂を占領してそこに全部引上げ、なほ首相官邸を占領してゐた反軍は華族會館や、幸樂、山王ホテルなどを占領して盛んに氣勢を擧げはじめた。

それでもこの日まではいつもの時間に警視廳前から議事堂の横を永田町から赤坂見付に出るいつもの道を通つて家に歸れたが、この間陸軍關係では秩父宮樣が青森からお歸りになり、軍部關係の各宮樣方や古參の大將連と無事鎭撫の御苦心は非常であつた樣に洩れ承つたが、結局反徒が頑强に命を奉じないので奉勅命令までもお讀み聞かせになつて、この日の午後の五時を期して全部歸順の命令が下つたと洩れ承つた。

それが五時までに何等歸順の命を奉ずる氣色がないので、八時迄三時間御延期になり、それでも埒が明かず結局二十八日の朝まで持越されて、なほかつ頑强に服從しないので二十八日の午後になつて遂に强行手段に移る事になつた。私は二十八日の朝は赤坂見付はすでに交通遮斷となつてゐたので六本木の方から櫻田本郷町に出て丸の内に這入らうとしたがどうしても警戒が嚴重で這入れずに、たうとう此處で自動車を乘りすて、雪の中を路地から路地と傳ひ乍ら内幸町までは

來たがもう鐵條網が張つてあり、軍隊が著劍をしてついて居り、日比谷公園の方には市街戰の戰車が二臺徐々に議事堂の方に向つて進んでゐるなど物々しい狀態だつたので、仕方なく新橋驛に後戻りして、幸ひまだ折々通過してゐた省線に乘つて東京驛から丸ビルに辿りついた。

こんな風でこの日は省線を利用する人達は案外無事に丸の内に這入れたので、發行所でも東子房君は勿論立子さん、女事務員の方々まで皆出揃つて居られた樣だつたが、餘りに世間が騷々しいので私にどうしようかとお尋ねでしたので、私は一時も早く急ぎの書類や大事なものだけ持つて、交通遮斷されないうちに入口を締めて早くお歸りなさいと注意した。

二十九日の朝は愈々ラヂオの放送もけたゝましく永田町、山王方面を中心として附近一帶の住民に避難の命令が下つた。同時にこの邊りの交通は絕對に途絕されたのみならず、東京全市に亘つて省線市電バス私鐵をも運轉を停止された。私はこの朝こそ本當の非常警戒の支度をして自動車を飛ばして道玄坂下まで來ると停められた。仕方なく環狀線を左へ左へと廻つて、遂に早稻田まで行つて這入らうとしたらまた止められたので、鐵道省の役人と稱して漸く許して貰つて舊市街に入つた。それから自動車を急がせて、もとゐた江戸川に出て知合ひの床屋で半紙を貰つて鐵道省と書いて自動車の前に貼つて、そして丸の内さして突破させたが幸ひに效を奏して無事に丸の内に這入つた。その時は十時を過ぎてゐたが丸の内は全部、どのビルヂングも寂として靜もなく、空は一面に曇雲に蓋はれ、地上には積雪皚々として何だか明るい月夜の晩の樣な光景であつた。そして馬場先門、日比谷方面には高い低い塹壕鐵條網など出來てゐてそれに兵士が銃口を櫻田門の方に向けて折り敷きの姿勢で命令を待つてゐると云ふ物凄い狀態であつた。

私はすでに三十數年もこの丸の内にゐて幾度かこんな事件に會つたが、さし當りこの前の震災當時の騷ぎと今度の騷ぎを比較して見ると、震災當時は何萬と云ふ避難の群衆が下町から潮の如く丸の内に押し寄せて來た騷ぎの中に、殆ど三日間立ちつゞけてゐたが、今度は當時と全く反對に絕對靜寂の丸の内を守りましたが、前回は前回で同じく苦勞をした中でも何となく皆と一緒になつて、死なば一緒にと云つたやうな賑かな苦勞であつたが今度はそれと反對に云ふに云はれぬ陰鬱な嫌な心持で成行を心配しつゝ緊張して、例の丸ビルの一室に頑張りながら皆から情報を集めて指揮してゐました。

ところが晝頃から少しづゝ歸順者が出て、なほ續いて續々と大部隊の歸順となり、大體三時過頃には無事鎭定の見越しがついて皆安堵の思ひをしました。私の家では麴町の長男の家や婿の家などから皆が避難して來て大騷ぎだつた位ですから、赤坂の眞下さんの家などでは大變だつたらうと思はれます。

事變はこんな事で大體一兵を損ぜず一砲を鳴らさず鎭定して、戒嚴令下に市民は長閑に雛祭り

も濟しましたが、さてその後の後始末についてさし當り組閣問題で近衛公拜辭のあと廣田外相がお受して組閣に著手しましたが、早速陸軍軍部の抗議となり、いま暗雲低迷のところです。卒直に申せば廣田氏も急ぎ過ぎた嫌もあり、政治家としては思慮の淺かつた點もある樣に思はれますが、然し幸ひ御昵懇の永田青嵐が後藤さんの尻を拭いたり市會のゴタ〳〵を治めたりした同氏獨得の經驗で廣田氏を助け何とか難局を切拔ける事と思ひ、且つその事を切望して居る次第です。

まあざつと事變當時の事をお留守中の一大事件として大略お知らせいたします。

御機嫌よう、お大事に。

昭和十一年三月七日

東京丸ビル　水竹居

巴里、友次郎氏方にて

虛子先生

拜啓

詳細なる事件の御報告に接し委細相判り申候。厦門沖にてニュースにて聞きたる時は驚愕暗然と致し申候。香港より引きかへさねばならぬかとも考へたること有之候。併しまあ大事に至らず鎭靜致し候こと何よりのことゝ存候。

巴里に來て友次郎下宿に同居致候。狹く暗い室に候へど主婦日本料理を苦心して提供致くれ候につき毎日日本にゐるやうな積りにて日を消し居候。まだ見物も碌にせず蟄居致居候。友次郎意外に眞面目に勉强致居候。六月末の試驗を受けて歸り度しとの希望も退け難く、小生は一足先に歸らんかと存候へど、それは絕對に友次郎賛成せず、今の所辛抱して滯在せんかと存居候。

巴里に來て見て、歐洲は大概判つたやうな心持致し候。巴里も碌に見物もせずにゐてもう歐洲が判つたやうなのは大笑ひに候へど、實際伊太利とか獨逸とかに出掛けて見るがところ無しと存候。此下宿の窓から見たのでもう歐洲全體が判つたやうな氣持に候。

主婦は大變親切にしてくれ私を畏敬致し居るやうにてこれも大笑ひに候。當地ペンクラブ、并に倫敦ペンクラブよりも招請せられるらしく候。俳句を一通り說明してやるべく候。

アルサス、ローレンの先きの獨逸との國境の一時獨立した小地方の大統領とかで今は佛國にゐる人からも政治談拔きの文學談をし度しとの會見申込あり、柄になけれども其も承知致置候。こ

れも大笑ひの一つに候。併し果して會見するか否か不明に候。上野氏からも招宴をうけ一夜三人で參り大に御馳走に相成候。其翌日、佐藤大使からも招宴、長岡大使、長谷部少將、其に當地の俳句研究家佐藤醇造といふ人等と一座仕り候。

明後日其佐藤醇造氏から招かれをり候。

當地はなか〳〵寒く、昨日などは例の王城にもらひしチャン〳〵コを著重ねし位に候。南佛と北佛とは中央の山脈に限られて天氣時候違ふ由、丁度清水トンネルで天氣違ふと同樣と存候。毎日陰鬱な天氣、一日も晴れたこと無く候。

アネモネはしほれ鞄は打重ね
フランスの女美し木の芽また

實際ローヌ河の岸の木の芽など花の如く美しく候。

マルセーユに上陸して巴里に來る迄の沿道のけしきは美しく候。殊にリオン邊迄は扁桃の花盛りにて、梅とも櫻ともつかぬやうな花、先づ杏花村ともいふべき眺め、それに桃も咲き、百花爛漫、春闌の感厚く候ひし。其に引かへ巴里は春寒も極端に候。

友次郎の作曲の先生ブッセル氏の級の演奏會あり見物に參り、友次郎の作曲は智惠子彈き、其他いづれもプリミエル・プリ級のもの許りの演奏。其時の事は一文を認め大阪朝日へ送り候。東

朝に出るか否か疑問に候。

近況御報告迄亂筆御推讀願上候。

風生、青邨、其他諸君に別に書狀不差出、宜敷御傳願上候。匆々拜具

四月五日

高濱虛子

赤星水竹居樣

昭和十一年五月十日印刷
昭和十一年五月二十日發行

定價金七拾錢

著者　赤星水竹居

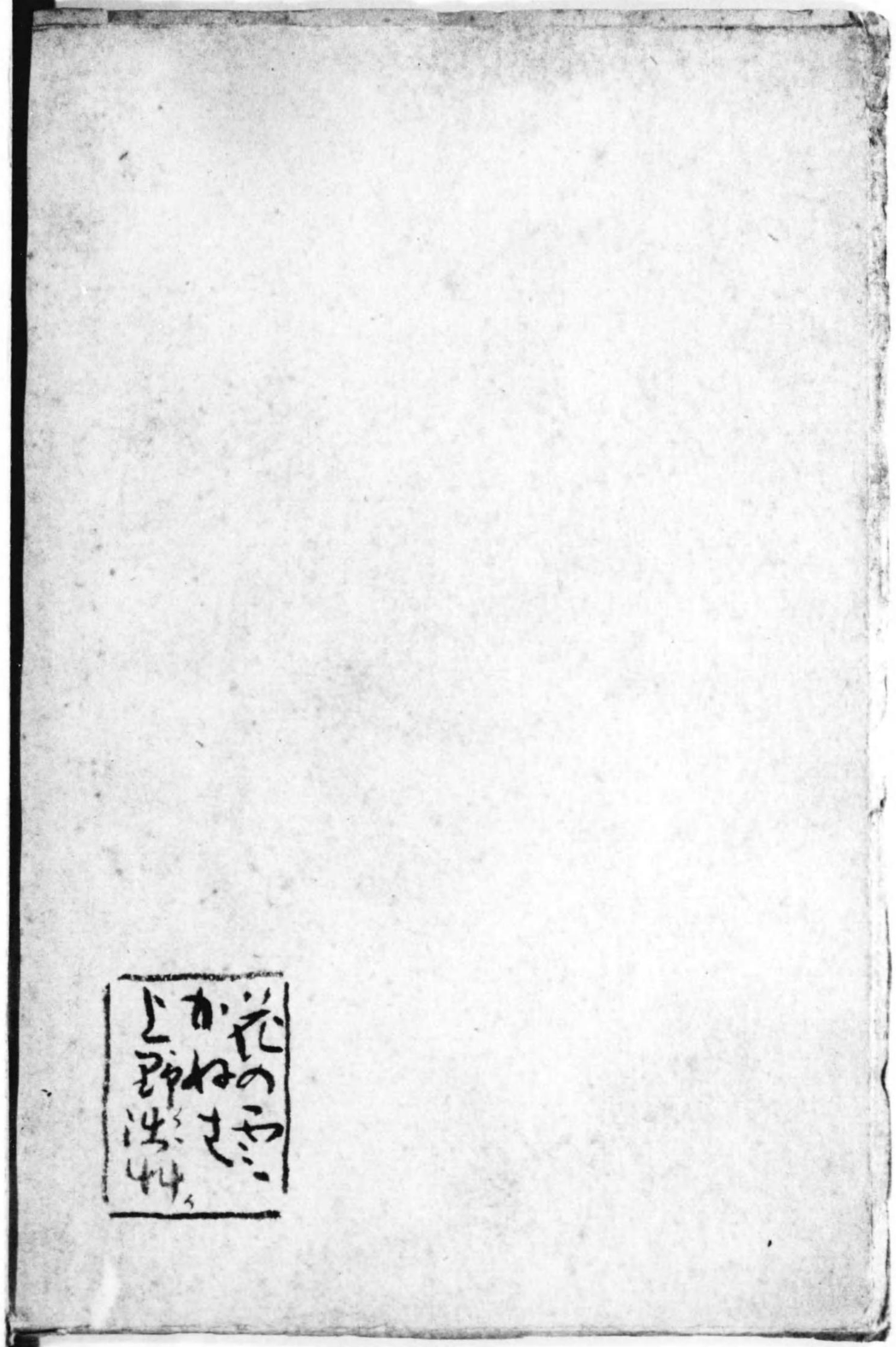
發行者　東京市世田谷區深澤町二ノ六五〇　赤星水竹居

印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二　菊地眞次郎

大日本印刷株式會社印刷

不許複製

東京便り

發行所　熊本市北新坪井町一二四　阿蘇發行所

終